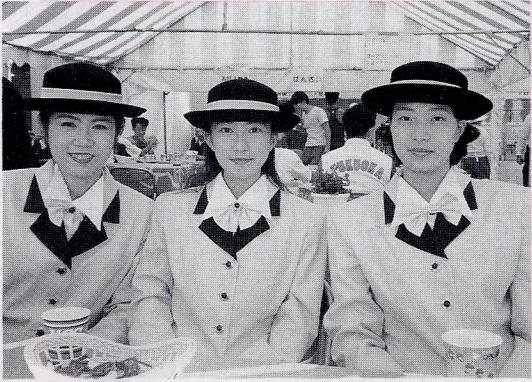


自転車旅行

文
写真・鈴木 平 (経済学部第二部)

Suzuki, Taira



国体会場にて(本人中央)

私は自転車で旅をすることが好きだ。車や列車で行けばほんの数時間の道のりを、自転車で一日かけて行ってみる。この文明の時代に何を、と呆れる人も多い。しかし、走り終えたときの達成感がたまらない。今年もまたこの感激を味わいたくて、残暑の続く国道二号線を走った。

目的地は、まだ行ったことのない大阪、大阪南港フェリー乗り場と決めた。二号線は西日本の大動脈だ。北海道から広島へ来て以来の憧れのルート。震災後の神戸の復旧工事もかなり進んだことを知り、今年こそ走破しようと決心した。

自転車旅行に出発する前はいつもかなり気持ちが高ぶるものだ。本当に一人で走れるだろうか。自転車は故障しないだろうか。天候は崩れないだろうか。心配は尽きない。しかし、心配ばかりしていても始まらない。自転車旅行は、どんなことに遭遇するかわからない冒険のようなものだ。これがまた自転車旅行の魅力なのかもしれない。重さを考え、最小限の荷物だけを詰めて自転車の両サイドにさげた。そして短パンとTシャツ、履き古した運動靴という女子大生らしからぬ出で立ちで広島を出発した。

初日の宿泊地は尾道だった。広島からは約八十八キロの距離がある。初日ということもあり気合いが入っていたが、八本松と田万里の上り坂には閉口した。今までの教訓から、上り坂では意地にならず自転車を押して進むことにしている。そのほうが結局速く進むうえ、体力の消耗

も少ない。

田万里を過ぎた所にあるガソリンスタンドのトイレで水を汲んでいたら、店内で休むよう勧められ、ありがたいことに冷たい麦茶をこちそうになった。その上、私の水筒いっぱい麦茶を入れて下さった。この時の麦茶の味は忘れられない。

自転車で旅行をしていると、知らない方々から親切にしていたくことが多い。一言励ましてもらえるだけで急に元気が出てくるものだ。自分だけで走っているようで、実はいろいろな方々に背中を押してもらいながら進んでいるのだな、と感謝の気持ちでいっぱいになる。

二日目は岡山泊、三日目は相生泊だった。毎日、毎日とにかく進むことだけを考えた。食事はもっぱらコンビニで買ったり、道路の脇に座って地図を見ながららぼった。トイレはガソリンスタンドかパチンコ店でお世話になった。水分の補給にも努めた。炎天下の国道は三五度を超え、長時間走ると脱水状態になる。一日二日はお茶を飲んだが、あまりトイレに行かなかつた。大量の汗になって水分が体からどんどん出てしまうのだ。

三日目頃には疲労もかなり溜まり、弱音を言いたくなってくる。私はなぜこんなことをしているのだろうと、自分を問い詰めることが多くなる。でも引き返すには遠すぎるし、ここで諦めたら自分に負けることになる。とにかく初心を貫徹するためにペダルを踏もうと自分にカツを入れた。

四日目に到着した神戸は最も印象深い街だ。地震の被害についてはニュースで

理解して来たつもりだったが、実際に現場に行ってみて改めて地震の大きさを知った。道路には凹凸がまだ多く残っており、崩れたままの家屋も目についた。早急な復興と新しい発展を願わずにはいられなかった。強く立ち上がろうとしている神戸に、今この時期に訪れたことはとても貴重な経験になったと思う。

五日目は台風が接近してきたため、大阪南港発のフェリーが全て欠航になってしまった。急ぎ最終目的地をJR大阪駅に変更した。神戸を早朝出発し、小雨の中最後の二十キロを走った。市内を随分迷った末、やっと大阪駅が見えて来た時には、今までの緊張が緩んだのか涙が溢れてきた。予想以上に暑くて厳しい行程だった。しかし、完走してみると全て懐かしいできごとと思えて来るから不思議だ。学生らしい旅にしたかったので、解体した自転車を担いで鈍行列車を乗り継いで広島へ戻った。

何日もかけて走った距離を数時間で帰って来てしまった。ハンドルを握り続けたため左手の指がしびれて、一か月間治らなかつた。車体が重いので担いだ肩に大アザができてしまった。それでも心底この旅行に満足している。

一般的に考えたら、なんとも苦勞な旅かもしれない。しかし、日々の追われた生活から離れ、無用の用に徹すること。もたままには良いのではないだろうか。

無茶はしないが無理はする。自分を見つめ忍耐力をつけつつ満足感を得たい方に、私は自転車旅行をお勧めしたい。